第3種郵便物認可　朝日新聞

青春スクロール
母校群像記

花園6回のラグビー部／日本代表も多数

佐野高校 2

佐野高（以下「佐高（さこう）」）ラグビー部は1970年代後半から80年代前半にかけ、全国大会へ6回出場。多くの日本代表選手を生んだ。苦しい時を共に過ごした絆は今も続く。

佐高ラグビー部監督の石井勝尉（53、83年卒）は3年間全国大会で花園に行った。早稲田大で日本代表に。主将だった石井は昼休みに、部員とホットプレートと肉や野菜を持ち寄り、教室で焼き肉パーティーをして先生に怒られたことも。釣り好きの桑川茂夫監督に「ラグビーの練習と釣りとどっちが大事なんですか」と詰め寄ると「釣りだ」と返された。「部員を信頼してくれていたと思う。みんな慕っていた」と石井。

石井と同級生のカメラマン吉田茂樹（53、84年卒）は副将だった。ラグビーをやりたくて、学区外から1時間かけて佐高に通った。練習後に裸になってみんなでプールに飛び込んだり、プロレスラーのような筋肉をつけようと、自主トレで千回スクワットをしたり。「本当に楽しかった。きつかったけれど、一生の友達ができた」。3年になる直前、石井と参加した選抜合宿のスクラム中、首の骨を折り首から下が動かなくなった。リハビリの末、吉田は1年遅れて卒業。今は松葉杖をつきカメラマンとして働く。石井は「吉田の分もやるぞとみんなの意識が変わった」。

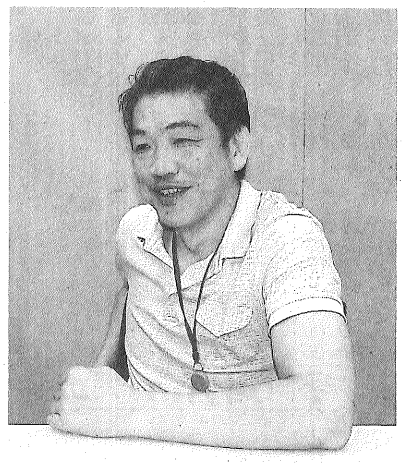
佐野日大高ラグビー部監督の藤掛三男（50、87年卒）は社会人ラグビー選手の時に日本代表に。当初は佐野日大高に入学したが、ラグビーに魅了され、1学年遅れて佐高を受験し直して入学した。

「かつての同級生が先輩、同級生は1歳下とすごく葛藤があったけれど、そこまでしてラグビーをやりたかった」。1年生の時に花園に出場し、16強まで健闘。大学でもラグビーを続けたいと、担任から無理と言われた模試E判定の早稲田大に猛勉強して合格。「回り道がすごく人生の中で生きることもあると身をもって言える。本気で自ら行動しようと生徒に話しています」

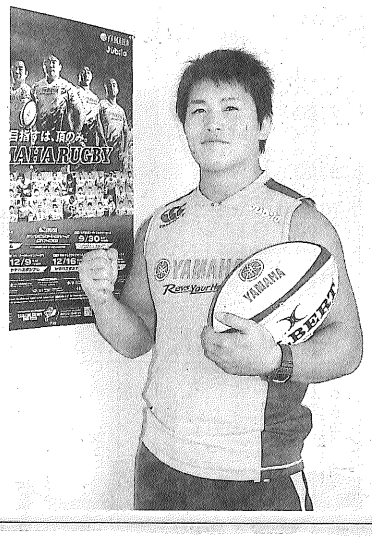
藤掛と同じアパレルメーカー「ワールド」で日本代表を8回経験した黒川雅弘（42、94年卒）は、3年の秋に県大会決勝で負け、花園には行けなかった。試合前、「これがみんなとやるのは最後なんだ」と涙がにじんだ。うまくなろうと試行錯誤しながら練習したわくわく感は忘れられない。「進学校だったから、根性教育はなくて、よくも悪くも自分たちで考えていた。だからこそみんなモチベーションを持って出来た」

藤掛が佐高監督時代に教えたヤマハ発動機ジュビロ選手の三村勇飛丸（28、2007年卒）も日本代表に選ばれた。2年生の時、試合に負け続け「どうせ負けるなら自分たちの納得したラグビーをして終わろう」と色々意見を出した。「受け身の姿勢より選手から意見が出ることを尊重してくれた監督だった。今思うと生意気だったけど」と笑う。県大会は宿敵国学院栃木にロスタイムでトライされ敗退。「花園に出たやつには負けないぞ」との思いが原動力に。ジュビロでは主将としてチームを日本選手権初優勝に導いた。

（敬称略）

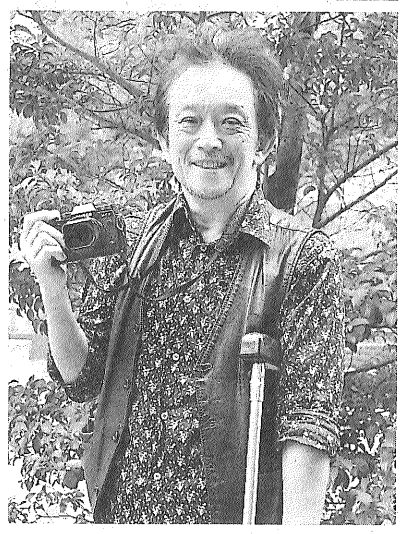


「部室は土だらけでごった返していた」と黒川

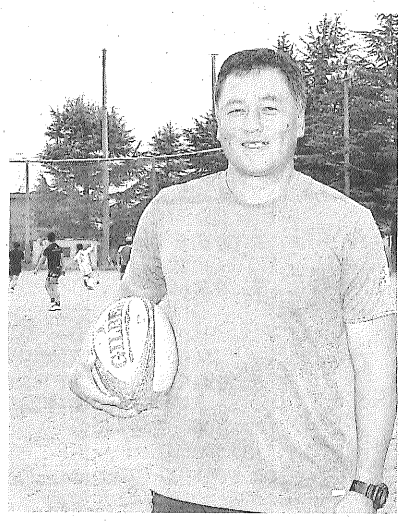


ヤマハ発動機ジュビロを主将として日本一に導いた三村

女子ラグビーの普及にも力を入れる石井



弟や石井のラグビーの様子を撮影し続けた吉田



佐野日大高ラグビー部で後進を育てる藤掛

石井が監督を務める佐高、藤掛が監督の佐野日大高ラグビー部の部員は23日、佐野市運動公園陸上競技場で開かれる「東北復興支援　さのラグビーフェスティバル2017」に出場する。佐高の思い出、OB・OGについての情報はutsunomiya@asahi.comの「佐高」係へ。